禅林寺 2 (中期)

永観堂の歴史における 2 期目は、永観律師が禅林寺の住職に就任し、寺院の浄土宗への移行を導いた静遍僧都（じょうへんそうず）の到来までの約 140 年間である。この期間、永観堂は真言密教の寺院であったが、東アジアのマーダヤマカ仏教（三論宗）も教えられていた。

1072 年に永観堂（当時の禅林寺）は、その指導力が何世紀にもおよぶ寺院の形を作った 2 番目の重要人物を迎えた。永観（ようかん）としても知られる永観律師（1033-1111）は、禅林寺の「中興の祖」と考えられている。禅林寺は「永観堂」という名前で、より広く知られるようになっていった。

永観は、禅林寺の第 6 代住職である深観（じんかん）（1001～1050）に弟子入りし、真言宗を学んだ。永観は東大寺と光明山で東アジアのマーダヤマカ佛教と浄土佛教の両方にさらされた。永観が禅林寺に戻って深観の跡を引き継いだとき、永観はこれら二つの宗派を寺院で紹介した。

永観は一般民衆の救済に焦点を当てていた。彼は念佛を唱える修行を奨励した。念佛は阿弥陀佛の名前を唱えることで、誰もが浄土に生まれ変わり、極楽であるゆる生物は悟りを開くことができると信じていた。永観は禅林寺に最初に念仏を紹介した人物で、毎日念佛を 6 万回唱えたと言われている。

永観の利他主義は、彼の多くの優れた仕事にも反映されている。彼は貧しい人々や、それを必要としている人々によく自分の服を与えた。1097 年、彼は薬王院を寺院内に設立した。薬王院は永観が植えた梅林から作られた薬を病人に与え、治療を施した。

永観は永観堂に安置されている最も有名な佛像の一つであり、1082 年に永観が目撃した奇跡の佛様「みかえり阿弥陀様」をもたらず役目も担っていたのである。